

川端康成全集 第十七卷

川端康成全集

第十七卷

文學時評 Ⅱ

新潮社

川端康成全集第十七卷

文學時評Ⅱ



昭和四十八年十一月三十日 發行
昭和五十二年八月十日 四刷

定價 二千八百圓

著者 川端康成

發行者 佐藤亮一

印刷者 塚田重

印刷所 塚田印刷株式會社

製本所 新宿加藤製本

東京都新宿區矢來町七一

發行所 株式會社新潮社

電話 業務部 東京三六—五二二
編集部 東京三六—五二二

〒二三 振替東京四一八〇八番

亂丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負擔にてお取替へいたします。

第十七卷

目次

昭和四年

昭和三年と四年	一三
〈年頭の文壇時評〉	
新春創作界の概観	一九
横光と十一谷	二五
文藝時評（四月）	三三
文藝時評（五月）	四九
〈形式主義文學理論を如何に観るか〉	六一
六月創作評	六三
文藝時評（七月）	七〇
文藝時評（八月）	七七

新 人 才 華	六
文 藝 時 評（九月）	一〇七
文 藝 時 評（十月）	一二七
文 藝 張 雜	一三三
文 藝 張 雜	一三八
片岡鐵兵氏の生活	一四三
林房雄氏の作品	一四七
噓 と 逆	一五二
〈自己を語る〉	
小説界の一年	一五六
新人群の登場	一六三
〈1930年の文藝と思潮〉	

昭和五年

「化かしと技術」に就て.....	一六九
作家と作品.....	一七九
「改造」と「中央公論」の作品.....	一八四
作家と作品.....	一九五
走馬燈的文章論.....	一九八
十一谷義三郎氏の「時の敗者唐人お吉」.....	二〇四
新人才華.....	二一〇
新興藝術派の作品.....	二一七
再び五月祭を.....	二一九
△「鐵窓の花」に序す△	
文壇散景.....	三〇〇

作家と作品	三六
ズウデルマン「憂愁夫人」	三九
藝術派作品を評す	三二
文壇散景	三六
〈文壇是々非々〉	
九月作品評	三九
「新潮」「作品」「新科學的」等	三五
今和次郎、吉田謙吉兩氏編著の「モデルノロデオ」	三八
創作界の一年	二六〇
昭和五年の藝術派作家及び作品	二六九
〈印象に残つた人と仕事〉	二七六

昭和六年

二月創作印象……………	二六
藝術派・明日の作家……………	二八
文藝時評（四月）……………	二九
「有憂華」を読む……………	三〇
文藝時評（七月）……………	三〇
小林秀雄著「文藝評論」……………	三一
文藝時評（十月）……………	三一
文藝月評（九月）……………	三二
文壇明暗二道……………	三三
一九三一年創作界の印象……………	三四

一つの整理期……………	三五四
〈一九三一年の文壇〉……………	

昭和七年

文藝時評（二月）……………	三六一
——作品を手がかりに——……………	
菊池氏の「勝敗」と直木氏の「青春行狀記」……………	三三七
文藝時評（三月）……………	三三七
文章について……………	三三八
文藝時評（四月）……………	三九三
「中央公論」と「新潮」の作品……………	四〇四
文藝時評（八月）……………	四〇七
近頃の感想……………	四一六

文藝時評（十月）	四三
----------	----

——作品と批評の一例——

「純文學はかくあらねばならぬ」といふ題にて	四三
-----------------------	----

文藝時評（十一月）	四六
-----------	----

文
學
時
評
Ⅱ

昭和四年

昭和三年と四年

〈年頭の文壇時評〉

昭和四年に先づ第一に考察させなければならぬ問題は、藝術活動の本質であるらしい。若しそれが今日既に解決済みのものであるならば、その解決を新しく拾ひ上げて省察を加へることが必要であるらしい。

この一見時代後れの問題、一度はマルクス主義者達に笑殺された問題が、今更問題としなければならぬ問題となつたとしても別段不思議はない。尙その問題が、藝術派からでなく、却てマルクス主義者達の間から頭を擡げて來たとしても、別段皮肉とするにも及ぶまい。餘りに當然の現象だからだ。唯それが藝術派にとつては少々遲きに過ぎた憾みがあるかもしれないが、マルクス主義者にとつては決して早きに過ぎる憂ひはない。

昭和三年に於て、

横光利一氏

を除く藝術派（マルクス主義文學者以外の人々と言ふ程の意味）の人々は、一體何を考へてゐたのか、殆ど分らぬのである。全く「藝術派の藝術知らず。」とでも云ふべきか。

正宗白鳥氏及び室生犀星氏の文藝時評は、それぞれの風格に徹した立派な藝術一言にはちがひなかつたらうが、餘りに私生活的な経験と詩とに根を下した自負に出發して、認識を廣く、正しくしようとする努力に乏しく、従つて隨筆的であつたから、進歩的な役目はつとめ得なかつた。中村武羅夫氏の「誰だ？ 花園を荒らす者は！」（新潮六月號）は、「永遠性を含んだ藝術を求め」、「イズムの文學より、個性の文學へ——。」と叫んだが、必ずしもマルキシズム文學を否定しようとしたのではなく、お前も認めるがこちらにも認めるであつた。ところが、この「花園」即ち「藝術」を、藝術作品と解するか、藝術活動と解するか、中村氏の氣持は前者に傾いてゐたらしいが、些か曖昧であつた。この曖昧さは重大であるかもしれぬ。藝術作品の永遠性を主張する説は遙かに微弱である。それは藝術活動の永遠性の一部分だからだ。中村氏にして若しこの藝術活動の本質を検討して、所論を進めたのであつたならば、プロレタリア派の諸雜誌から、あれ程の揶揄的反駁を蒙らなかつたであらう。いかなる經濟學も政治も、

この花園

は荒し得ないからである。次に偉大な豫言先驅者生田長江氏の「主義者の主義知らず」（新潮十月號）は、「プロレタリア的粉飾を行はれたアメリカニズム」（尾崎士郎氏の言葉）や講義録的マルクス青年やの文學に對する辛辣な皮肉であるが、大宅壯一氏が指摘した如く、長江氏が目下いかなる文學に先驅しつゝあるかが語られてゐないので、我等後進は川の眞中で、負はれた脊から投げ出された感じである。將來に於けるマルキシズム文學の没落を豫言することは、地球の滅亡を豫言することより、百十倍容易ではあるが、少くとも現下に於ては、もう一層正面から親切な解剖を見せて貰はないと、我等の教へられるところは少いのである。また「左傾者だけが勇敢であるか」（新潮十一月號）にして